

---

# 名門の無力者

錆びた刀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名門の無力者

### 【Nコード】

N8171S

### 【作者名】

錆びた刀

### 【あらすじ】

魔法使いの世界に一人だけ魔力を持たない子供が生まれた。主人公はたった一人の魔力を持たない人物となっています。その子供の秘密と生き方のお話となっています。

## 世界設定（前書き）

このお話についての設定となっています。

また、話の途中で設定が増えています。

設定情報を更新した場合は話の前書きにてお知らせいたします。

## 世界設定

### 世界設定

この世界には魔法があふれている。

そして、その使い手である魔法使いもあふれている。

いや、あふれているのでは世界中のすべての人が魔法使いなのである。

それだけでなく、動物は魔法を解して人とのコミュニケーションをとり、自然は精霊を解して人とともに共存している。

魔法を使用するには魔力を使用しなければいけない。

この世界のすべてには魔力が宿っている。

なぜそうなったのかというと突如隕石が地球へ振ってきた。

しかし、隕石は大気圏内に突入するとともに塵へと消えていった。

その塵が世界中に広がったことにより地球に存在するものは魔法使いへとなった。

### 魔法には

- ・ 自分の魔力だけで起こす自力魔法（じりよくまほう）
  - ・ 魔力を持った動物を使役する契約魔法（けいやくまほう）
  - ・ 精霊の力を借りる精霊魔法（せいれいまほう）
  - ・ 世界の力を借りる世界魔法（せかいまほう）
- この世界の魔法はこの四つに分類される。

### 魔法の力関係

自力魔法<契約魔法<精霊魔法<世界魔法

となっている。

## 魔法習得人数

自力魔法 > 契約魔法 > 精霊魔族 > 世界魔法  
となっている。

## 魔法使いの位

・将(しょう) : 上位50人に位置する魔法使いに与えられる。  
・王(おう) : 上位10人に位置する魔法使いに与えられる。  
・神(かみ) : 上位5人に位置する魔法使いに与えられる。  
となっており、位を持つ者たちは一定の範囲内であれば法を犯すことも許されている。

## 代表的期名魔法使い一族

・紫皇院  
: 日本屈指の魔法使い一族

・皇神  
: 世界最強の魔法使いの一族であるため、宗家を日本に残し分家は世界各地に散らばっている。

かつ、現最強の魔法使いを有し、位の半分を一族が与えられている。

・ ????

: 中国屈指の魔法使い一族

・ ????

: アメリカ屈指の魔法使い一族

・ ????

: イギリス屈指の魔法使い一族

・ ????

: ドイツ屈指の魔法使い一族

となっており魔法六家と呼ばれている。

この話はそんな世界の日本の魔法使いの名門に生まれた魔力を持たない少年の話です。

## 世界設定（後書き）

今回はこの話のプロローグを書く予定にしています。

話の本編はプロローグ後になりますが、掲載予定日は現在決まっています。

## プロローグ（前書き）

世界設定の設定情報を更新いたしました。

今回の話を読む前にそちらを読み直してからお読みいただくとわかりやすいのでまずそちらからお読みください。

## プロローグ

### プロローグ

紫皇院（しこういん）一族本家：

そこには一族とその分家の者が集っていた。

「「「「「おめでとうございます。」「」「」「」

紫皇院家現頭首紫皇院源一郎とその妻椿に祝いの言葉をのべた。

「まだ子が産まれたわけではないがありがとう。」

源一郎はそこに集まっている者たちへとそう声をかけた。

「皆さん、ありがとう。」

椿も感謝の言葉をそこに集っている者たちへ声をかけた。

「まこと二人の子であれば素晴らしき力を持って産まれるであろうな。」

そう二人に声をかけたのは源一郎の父である総一郎であった。

「ありがとうございます父上。」

「ありがとうございますお義父様（とうさま）。」

源一郎と椿は頭を下げながら総一郎にお礼のことがを言った。

「そのようなことはせんでよい。」

これからはおぬし等のような若者が時代を作るのだからな。

わしの様なものはその時代を眺めるだけじゃよ。」

「そんなことはございません。」

お義父様はまだまだ若いではないですか。」

「お世辞でもそうゆうてくれて嬉しいぞ椿。」

総一郎は椿に対してそう返事をした。

椿が言ったように総一郎の年は50歳になったばかりであった。たいして源一郎は25歳、椿は23歳であった。

そして、源一郎は20歳になると同時に頭首となった。

なぜ源一郎がそんなにも早く頭首になれたかという将の位（くらい）を持つているためである。

「お子様が産まれましたら皇神一族をわれ等が従える時代となるでしょうな。」

「いよいよ紫皇家が世界の頂点に立つことができますでしょう。」  
などと集った者たちが口々に言った。

「皆さん、それは気が早すぎるのではないですか？」

椿が周りの者たちを諫めるためにそう口にしたが、

「そのようなことはございません。」

必ず世界最強の魔法使いとなり、われらを導くお子が産まれますよう。」

などと言った。

とある場所：

「ああ、愛しきわが息子よ。」

私の声が聞こえますか？」

どこからとも無く女性の声が聞こえた。

「あなたは誰ですか？」

幼い声その声にこたえた。

「私はあなたの母よ。」

そして、私はあなたであり、あなたは私。」

「どういうこと？」

「今はわからなくていいわ。」

いずれわかる時がくるからね。」

「わかった。」

ほかの事を聞いてもいいですか？」

「ええ。」

「答えられることならね。」

「なぜ僕に話しかけてきたのですか？」

「あなたは私のたった一人の息子だからよ。」

「じゃあ、あなたは僕に何を望むのですか？」

「このつまらない世界をあなたに変えてもらいたいからよ。」

「どうやったら世界を変えられるんですか？」

「あなたはあなたのやりたいようにすればいいわ。」

「それが私の望みであり、世界を変えることになるのだから。」

「僕のやりたいように。」

「ええ、そうよ。」

「私はいつもあなたを見守っているわ。」

「私はいつもあなたとともに。」

紫皇院一族本家：

椿がついに双子の男女を出産した。

「なんと…。」

「そんな…。」

集まっていた者たちは産まれてきた男の子を見て絶句した。

「魔力を持たぬ子供が生まれるなど…。」

産まれてきた子供たちは産まれたその瞬間から大きく違っていった。

男の子には魔力が存在しなかった。

女の子には世界屈指の魔力を持っていた。

「異端なる出来損ないが産まれてしまった…。」

源一郎は産まれたばかりの男の子を見てそう呟いた。

「そう気を落とす出ない源一郎。」

俯いていた源一郎にそう声をかけたのは総一郎であった。

「しかし父さん…。」

「確かに一人は魔力を持たぬ子じゃった。

しかし、もう一人は今ですら世界屈指の魔力を持っている。

この子ならわれらの念願の望みをかなえてくれるじゃろう。」

「そうですね。」

「そうだ、そうに違いない!!」

源一郎は総一郎のその言葉を聴き目に力が戻った。

「して、名をなんとする?」

「出来損ないは剣(つるぎ)。」

「そして、われらの希望は桜(さくら)と名づけます。」

こうして紫皇院家には魔力を持たない男の子剣と、世界屈指の魔力を持った女の子桜が誕生した。

このことがこの後の世界を大きく動かすことになるとは紫皇院一族のものは気づくことは無かった。

しかし、その事を知っている人物が一人だけいた。

「ついに私の愛しい息子が産まれた。

必ずあの子ならこのつまらない世界を変えてくれる。

あの子はどんな世界に変えてくれるのかしら?

今から楽しみだわ。

「どんなことがあっても私はあなたを愛しているわ剣。」

果たしてそのことに気づいたものとはいったい誰だったのか。

そして、世界はどのように変化していくのかは今誰にもわからなかった。

## プロローグ（後書き）

初めてのオリジナルストーリーを書いてみましたがどうだったでしょうか？

次の話より本編となっております。

この話をより良くしたいため読んでくださったかたからの感想や疑問お待ちしております。

お時間がありましたらよろしく願いたします。

**第1話 ついに始まる物語（前書き）**

紫皇院一族にてある決断が下される。

詳しくは本編にて。



自分の訓練をしなさい！！

お兄様の訓練には私が付き合います！！

あなたたちは自分の訓練に行きなさい！！」

魔力をあふれさせながらそう言った。

「……は、はい！！」「……」

少年たちはあふれ出している魔力に恐怖を感じその場を後にした。

「今すぐに治療いたしますねお兄様。

自然治療。」

桜が治療用魔法を発動させると剣の体が光だし体の傷や服が暴行を受ける前の状態へと戻った。

「何でここに来たんだ桜。」

あいつらのことだから気が済んだらどこかに行くのはいつものことなのに。」

動けるようになった剣は桜にそう言った。

「いつもあのようなことをされていたのですか！！」

桜は剣がいつもあのような暴行を受けているとは思わなかったため驚きの余り声を出してしまった。

「そういえばお前は知らなかったんだっただな。」

なら、今言った事は忘れる。」

剣は桜がいつも自分が暴行されていることを知らなかったことを忘れていたため言ってしまったため忘れるようにといった。

「そんなことできません！！」

このことはお父様たちにご存知なんですか？」

「はあ……。」

この家で知らなかったのはお前だけだよ。

いつもは母上が治療してくれていたからお前が知らなかったんだよ。」

剣は桜に真実を告げた。

「そ、そんな……。」

知っていてお父様たちは何もしないのですか？」

「母上は何度も父上に止めさせるように言ったが聞き入れなかったんだよ。」

それに、母上は無能者を産んだという事で立場も悪いからな。だから、せめてお前には知られないように気を配っていたんだよ。それにしても何でお前はここに来たんだ？」

「誰かが魔法を行使していることを感じたため何があったのか確かめようとして…」

桜は顔を青くしながらも剣の質問に答えた。

「そうか。」

なられからは誰かが魔法を行使しているのを感じても来ないことだ。

そうすればこんなことを見なくて済むからな。」

「そんなことできません！！」

今決めました。

今日から私はお兄様のそばを離れません！！」

桜は顔は青いままだが決心を口にした。

しかし、

「止めておけ。」

お前の立場も悪くなるだけだぞ。

お前はこれから紫皇院一族を背負うんだから俺みたいな無能者にかまっていけないで魔法の訓練に集中しろ。」

「嫌です。」

たとえ立場が悪くなるうとも私はお兄様のそばを離れません！！」

「はあ…。」

それがどういふことになるかきちんと理解しているのか？」

「どういふことですか？」

桜は剣が何を言っているのかが理解できなかったため聞き返した。

「お前が俺にかまっていると母上がそうさせているんだと周りの連中が考えて母上の立場が今以上に悪くなるんだよ。」

「そ、そんな…。」

桜は自分の行動で椿の紫皇院一族での立場を悪くしてしまうと知りシヨックを受けた。

「だからこれからはお前は俺に関わるな。いいな。」

剣は自分の言いたいことを言ったため桜をその場に残して去った。

剣の自室：

「剣今いいかしら？」

部屋の外から女性の声がした。

「かまいませんよ母上。」

部屋に来たのが母である椿であったためそう答えた。

「今日もまたあつたのね。」

「ごめんなさいね、魔力を持たないままあなたを産んでしまつて。」

魔力さえあればこんなことにはならなかったのに……。」

椿はいつものように涙声で剣に謝った。

「母上俺は気にしていません。」

それに、子供の魔力を親が決めて産むことはできないのですから

母上は何も悪くありませんよ。」

剣は椿を見ながらいつもとは違うやさしい笑顔を向けながらそう言った。

「剣……。」

椿は剣を自分の胸に抱きしめた。

「それよりも母上、困ったことがありました。」

剣は椿から身を話し今日あつたことを話そうとしたが、椿は剣が離れようとしていることを感じ取りより強く抱きしめたためその状態で剣は話し始めた。

「困ったこと？」

「何があつたの？」

椿は剣にやさしく問いかけた。

「桜に暴行されているところを見られてしまいました。」  
「そう。」

ついに知られてしまったのね。

いずれ知られると覚悟していたけどこんなに早く知られるなんて  
ね。」

二人の間に沈黙が下りた。

しばらくして椿は剣にあることを話し始めた。

「剣、私は決めました。」

「何をですか母上。」

「一緒にこの家を出ましょう。」

そうすればあなたは傷つかなくて済むわ。

私と外の世界で幸せになりましょう。」

「でも母上、桜はどうするの？」

それに俺のことは気にしなくてかまいませんよ。」

「桜は大丈夫よ。」

私たちがいなくてもこの家や一族の者たちがいるからね。

私はあなたが傷つくことに耐えられない。

それに、この一族にも愛想が付きました。

だから出ていこうと決めました。

剣あなたは私と一緒に来てくれるわよね？」

剣は椿の真剣な瞳を見て決心をした。

「うん。」

俺は母上と一緒にこの家を出て行くよ。」

「ありがとう剣。」

それでは今日その事を告げて明日にでも出て行きましょう。

だから準備をしておいてね。」

「わかりました。」

すぐにでも準備を整えます。」

「ええ、お願いね。」

私も準備してくるわ。」  
そして、椿は準備をするために部屋を出て行った。  
剣は椿が出て行くまで見ており出ていたのを確認してから準備を始めた。

紫皇院本家居間：

そこには一族の大人たちと椿、剣、桜がいた。

「私と剣は明日にもここを出て行きます。」

椿は紫皇院頭首である紫皇院源一郎にそう告げた。

「好きにしろ。」

お前もその出来損ないもわれらには必要ないからな。」

源一郎は妻と息子にそう言いはなった。

「ありがとうございます。」

それではこの離婚届に氏名を書いて判を押して役所に出しておいでください。

それと桜の親権はそちらが、剣の親権は私がもらいます。」

「それでかまわん。」

桜さえいればそれでかまわないからな。」

「………そうだ。」

桜様さえいればこの紫皇院家は安泰だ。「……」

源一郎の言い放った言葉を分家たちが肯定した。

「椿よ、出て行くならこれをもっていきなさい。」

今まで黙っていた総一郎が椿にそう声をかけた。

そして、通帳を一つ投げ渡した。

「これは？」

椿は渡された通帳を見ていぶかしげに総一郎に問いかけた。

「子を育てるにはそれなりに金がかかるだろう。」

それだけあれば事足りるだろう。」

「確かに剣を育てるにもお金がかかりますからね。もらえるのであればもらいますよ。」

椿は中身を確認してそう言った。

「父上そのようなことをこの者たちにしてやらなくても良いのではないですか？」

無能者を産むような女と無能者には過ぎたことではないのですか？」

源一郎は総一郎の行ったことに納得できなかったためにそう問いかけた。

「確かに椿は魔力を持たぬ子を産んだ。

しかし、世界屈指の魔力を持った桜を産んでもいる。

そのことへの対価だ。」

総一郎が源一郎に対してなぜ渡したのかを明かした。

「なるほど。」

確かにこの女は桜の母でもありましたね。

そのくらいはしてやらねばわれら一族の何も傷が付きますね。」

源一郎や分家のものが源一郎の言葉を聴き納得した。

「待つてください！！」

父上私も母上とお兄様と一緒にいきます。」

今まで黙っていた桜がついに口を開いた。

「それはダメだ。」

お前はこの紫皇院一族が皇神一族を従えさせるという使命があるんだ。

ゆえに出て行くことは許さん。」

「そうよ桜。」

あなたはここにいれば幸せになれるわ。

だからあなたはここにいなさい。」

源一郎と椿は桜にそう言った。

「嫌です。」

私は母上とお兄様と一緒にいきます。」

しかし、桜はそれでもあきらめなかった。

「それならば仕方ないな。」

「それじゃあ、父上私も…。」

源一郎がわかってくれたと思った桜は喜んだ。

しかし、

「力づくで解ってもらうしかないようだな。

静香しずか、香苗かなえ、桜を取り押さえよ。」

源一郎は一族内でも屈指の実力を持つ二人にそう命令した。

「はっ！！」

命令された二人は一気に桜に近づき、魔法を放った。

「強制睡眠すいみん」

「そんな…。」

桜はいきなりされたため抵抗することができなかった。

「よくやった二人とも。」

桜が明日も起きないようにそばに控えておれ。

良いな。」

源一郎は二人にそう告げた。

「はい。」

二人は源一郎に頭を下げた。

「それでは今日の集まりはここまでだ。」

源一郎は集まっている全員にそう告げて部屋を後にした。

## 第1話 ついに始まる物語（後書き）

この決断が今後どのように影響していくのか。  
それはこれから剣の行動にて語られる。

今後の投稿は不定期となっています。

## 第2話 新たな邂逅と明かされた秘密の一部（前書き）

更新に時間がかかってしまい誠に申し訳ありませんでした。

今回はあることの秘密の一部が出てきます。

## 第2話 新たな邂逅と明かされた秘密の一部

### 第2話 新たな邂逅と明かされた秘密の一部

剣の自室：

部屋の片付けと、出て行く準備を終えた剣は明日のために就寝しようとしていた。

「剣おきている?」

部屋の外から椿が声をかけた。

「おきていますよ母上。」

剣が答えたことによつて椿は部屋に入ってきた。

「どうかしましたか母上?」

剣は部屋へ入ってきた椿が荷物を持っていたためそう問いかけた。

「明日すぐに出て行けるように一緒にいようと思つてね。」

だから、今日は一緒に寝ましょ?」

椿は剣にそう答えた。

「そうですね、その方がいいですね。」

「後は、私たちが明日出て行くことを良く思つていない人たちがあなたを襲つてきたた時にあなたを守りたくてね。」

椿は紫皇院一族で自分たちを良く思つていないものの中には自分たちが生きていることすら気に入らないものたちがいることを知っていたため、そのことも伝えた。

「ああ、なるほど。」

そんな人たちもいましたね。」

「後は私が剣と一緒に寝たかったから。」

「母上、僕はもう寝ようと考えていたのですがどうします?」

剣は椿に寝ようと考えていることを伝えた。

「それじゃあ、私も寝るわ。」

そう言っつて椿は剣のベットへ入った。

「いらっしやい剣。」

椿はそう言っつて剣にベットに入るように言った。

「それじゃ、失礼します。」

剣は椿のいる自分のベットにそう言っつて入った。

椿は剣がベットに入ったために抱きしめた。

「剣とこうして寝るのははじめてね。」

椿は笑顔でそう言った。

「そうですね。」

母上と一緒に寝るのは初めてですね。」

剣も笑顔でそう答えた。

「剣は桜のことをどう思っているの?」

椿は今まで剣に今まで聞けなかったことを聞いた。

「どう思っているとはどういうことですか?」

「恨んだりしたことはないかってことよ。」

「そんなことは考えたことはありませんよ。」

ただの妹としか考えていません。」

「そう。」

なら良かったわ。

恨むのなら私を憎みなさい。

あなたを魔力のない身で産んだのは私なのだから。」

「僕は魔力がないことをなんとも思っつていません。」

だから誰かを恨んだことはありません。」

「そう。」

椿は一言だけ答えた。

「それより母上、離れていただけませんか?」

「あらどうして?」

「その……。」

「恥ずかしくてこのままじゃ眠れませんよ。」

「ふふ。」

「いいじゃない。」

「今日はこのまま寝ましょ。」

「わかりました。」

「剣はあきらめたそう答えた。」

「明日からはたまに一緒に寝ましょうね。」

「えっと、それは……。」

「明日からは私たちだけなんだから。」

「ね、いいでしょ？」

「たまにはですよ。」

「剣は明日から椿とふたりだけで生きていくことから椿の支えになろうと考えたため、自分にできることで支えようと思ったため、そう答えた。」

「おやすみなさい、剣。」

「おやすみなさい、母上。」

「そして、ふたりは眠りに付いた。」

とある場所：

「今そこにいるのは剣だけだった。」

「いよいよ明日あの家を出るのね。」

「剣しかない空間で女の人の声が聞こえてきた。」

「うん。」

「明日母上と一緒にあの家を出ることになりました。」

「ついに剣がこの世界を変えるときが来たわ。」

「世界を剣がどう変えるのかとても楽しみだわ。」

「がんばってね剣。」

「本当に僕の好きにしていいいんですか？」

「ええかまわないわよ。」

剣は私の大切な息子なんですもの。

だからこの世界はあなたの好きにしていいいのよ。」

「剣があなたの息子とはどういうことですか！！」

剣は私の息子です！！」

今までそこにいなかった椿が姿の見えない人物にそう言った。

「何で母上がここに？」

「彼女は私がここに招いたの。」

「母かあさま様が？」

なぜです？」

「彼女もあなたのことを知っておいてもらうためよ。」

「それは今まで僕にも教えてくれなかったことですか？」

「ええ、でもすべてはまだ教えられないけどね。」

「そうですね。」

剣と姿の見えない女性が話している間に椿は姿の見えない女性を探していた。

「どこに居るんですか！！」

姿を見せなさい！！」

椿が魔法を使用して女性の姿を探したが見つかることができなかった。

その為、椿は姿の見えない女性にそう言った。

「残念だけど私は姿を見せることができないの。」

たとえ剣にもね。」

「そんなことが許されると思っているの！！」

話をしたいのなら姿を見せなさい！！」

「母上、落ち着いてください。」

母様は姿を見せることができないと言ったんです。

なら、見られるようになればいいんです。

言い換えれば見る側が見られるだけの実力を必要としているんで

す。

だから僕たちの近くにいるけれど僕たちが認識できていないんです。」

「そうしたことよ剣。」

私を見る側が認識することができない状態で私が姿を見せると見たものは必ず死んでしまうの。

だから私からは姿を見せることができないのよ。

でも、剣はもう少ししたら私を見られるようになるからね。

だからもう少し私の姿を見たくても我慢してね。」

「わかりました。」

剣は素直にそう答えた。

しかし、椿はそうもいかなかった。

「なら姿を見せないなら名前くらい名乗りなさい!!」

それが話をするものとしての礼儀でしょ!!」

「確かに人間ではそうでしょうね。」

でも、私を認識できないものに私の名前を聞くことはできないわ。名前は相手を認識してはじめて理解できるもの。

だから今私が名前を名乗ってもあなたたちには理解できないゆえに、名乗らないの。」

椿は姿の見えない女性が言ったことを理解して悔しそうな表情をした。

「それで母様、僕のことを教えてくれませんか？」

「それもそうね。」

剣が私とそこにいる椿さんの息子と言つのは簡単なことよ。

剣の魂は私が生み出し、器である肉体は椿さんが生み出したからなの。」

「確かに魂を生み出すことはできるけれど私はそんなことをされた覚えはありません!!」

でたらめを言わないでください!!」

「私を認識できないのだから私の行動を認識できるはずないでしょ？」

それに、私があなたに剣の魂を入れなければ剣は産まれることはなかったわ。」

「そんなことはありません!!」

あなたが何もしなくても剣は産まれてきました!!

私は双子を身ごもっていたのですから!!」

「それは無理よ。」

男の子は魂の死んだ状態だったために生まれても生きてはいなかった。」

「そんなことはありません!!」

「いいえ、これは事実よ。」

剣の妹さんがあなたの内にいたときから強大な魔力を有していたために魂は徐々に弱っていつていたの。

そして、彼女は自分を維持するために男の子の魂を自らに取り込んでいたの。

その為、魂のない肉体は死ぬしかなかったの。」

「そ、そんな・・・。」

今までは怒りの感情をあらわにして話していた椿は姿の見えない女性の言っていることを理解したため、言葉を失った。

「だから剣は私の息子であり椿さんの息子でもあるの。」

そして、魔力量は魂の強さによって決まるの。」

だから剣は魔力を持っていないのよ。」

「何で剣の魂を魔力を持つこともできないほど弱く作ったんですか!!」

そのせいで剣がどんな目にあったかわかっているんですか!!」

椿は剣が魔力を持っていないのが姿の見えない女性にそう言った。

「何か勘違いしていないかしら？」

剣以上に魂の強いものはこの世に存在しないわ。

同等なのは私だけ。」

「なら、なぜ剣は魔力を持っていないんですか!!」

「それは簡単よ。」

「魔力がこの星にとって異物だからよ。」

「魔力が異物？」

「今まで黙っていた剣が疑問に思ったことを口にした。」

「そうよ。」

「魔力は地球に落ちてきた隕石の粉塵によって発生したもののなの。」

「だから魔力を持ったものは本来この星にとっての異物なの。」

「その為、剣は魔力を持っていないの。」

「それでも今の世界は魔力によって維持されているわ。」

「魂を作ることができのなら魔力を持たせるくらいで来たはずよ。」

「！！」

「なぜ魔力を持たせなかったの！！」

「剣には魔力なんて必要ないからよ。」

「そんなものがなくても剣は強いからね。」

「それに、人は地球以外では無力な存在でしかないもの。」

「そんな欠陥な状態で私が魂を生み出すわけないでしょ？」

「私たちが欠陥品だとも言いたい！！」

「そのとおりよ。」

「あなたたち人間は欠陥品と言えるわ。」

「でも、剣だけは違うわ。」

「剣は完璧な人間よ。」

「だから魔力なんて必要ないの。」

「剣にはそれ以上のものを持っているのだから。」

「魔力以上のもの？」

「剣はどんなものなのか気になったためその事を口にした。」

「ええ、そうよ。」

「でも今はまだ使えないけどね。」

「どうしてですか？」

「魂の器である肉体がその力に耐えられないからよ。」

「もう少ししたらその力を理解して使えるようになるわよ。」

「それに、あなたを待っている者たちもいるからね。」

力が使えるようになったら迎えにいつてあげるのよ。」

「その待っている人のことも力を使えるようになればわかると思うことですね。」

「そういうことよ。」

それで椿さんは他に聞きたいことはないかしら？

答えられることは答えるわよ。」

「これだけは答えてください。」

あなたは剣の見方なんですか？

真剣な顔をして姿の見えない女性に聞いた。

「当然見方よ。」

どんなことがあるかと私は剣の見方。

そして、私は剣であり、剣は私である。

これは変わらない真実だからね。」

姿の見えない女性の声が今までと違い真剣さが伝わってきた。

「なら、あなたが何者でもかまいません。」

私の聞きたかったことはそれだけです。」

「そう。」

それじゃあ、またね剣。」

「次はいつ会えますか？」

剣は今まで姿の見えない女性に言ったことがない言葉をいった。

「どうしたの剣？」

次にいつ会えるかなんて今まで言わなかったのに。」

「今まではあなたはなぜ母なのかわかったからです。」

母に会いたいと思うことはいけませんか？」

「いいえ。」

そんなことはないわよ。」

私は剣に次にいつ会えるのか聞かれたから嬉しかったのよ。」

「そうですか。」

それなら良かったです。」

「次に私たちがここで合うのはあなたが力を使えるようになった日

よ。

私はその日を楽しみにしているからね。」

「はい。」

僕も楽しみです。」

「それでは私はこれで失礼するわね。」

その言葉を聴き終えた剣と椿の姿が色が色を失いだし、完全に色がなくなつた後、形を成していたものは消えてなくなつた。

## 第2話 新たな邂逅と明かされた秘密の一部（後書き）

今回は紫皇院からの旅立ちと剣君の秘密が少しあきらかになります。

また、内容をいろいろ検討するため、更新が遅くなってしまうと思います。がよろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8171s/>

---

名門の無力者

2011年9月7日03時28分発行